斎藤近昌（他二十三名は未詳）らであったことが判明している。

関連事項

① 草創期の逸話〔板谷波山の回顧談〕

私は今晩先輩の皆さんから學校の起源と云ふやうな御話から諸先生のいろ〳〵御人格に就て大層有益なる御話を御聞きしまして、非常に愉快且つ喜んで居りますが、私にも何か話をしろと云ふことでございます。相當皆様より表面の御話を御聞きしましたから少しく向を變へて自分の知つている限りで内側の方、裏側の方から見た逸話と云ふ事で御話を致す事にします。又柔かい方から見ると云ふことも一つの觀方と思ひますし、又面白いことと思ひます。

丁度私は二十二年の九月に學校に入りましたのですが、先刻御話があつたやうに美術學校と云ふものは何をする所か知らなかつた位で、學校の制服を見て神主の學校と思つて居りました。吾々が入つた時に、大正天皇の立皇太子式がありまして、官立學校へ入つて居るので、生徒は制服を着なければならぬ、新入生徒等はどんな物が出來るかと喜んでゐた所が神主の着るやうな物が來たので、曾て聞た神主學校と云ふものは是だなと思つて、中には斯んな着物を着せられるなら退學して仕舞ふと云ふことで着物でかなり校長の所に押掛けて行つて揉めたこともありました。それから愈々錦の御旗を立てゝ宮城の前に行つて萬歳を唱へて非常に世の注意を引いて歸つて來たことがあります。

其時に丁度校長は濱尾男爵で其次に岡倉先生。彫刻科の先生には高村、竹内、石川、山田、助教授の林、雇の先生には後藤、藤田文藏、新海、米原、山本〔本山（白雲。波山と同期）の誤りか。波山の在校当時、新海（竹太郎）、米原（雲海）、本山白雲は本校の雇ではなく依嘱銅像製作の助手であった〕の諸先生、其以前に加納鉄哉先生も入つて居つたのですが、私の入つた時分には居られなかつた。學課の先生には上原、黒川博士、今泉先生、繪畫の先生は橋本、川端、巨勢、狩野、結城正明先生、雇の櫻井先生は非常に酒を飲むので酒呑童子と云つて居つた。それから三代廣重〔安藤広近〕、金工科には海野先生、鑄金科に岡崎先生、大島先生、此方は蠟型の先生で、彫刻科に蠟型を教へに毎週二時間づゝ私共に稽古を附けられて居つた方であります。漆工科に小川松民先生、橋本市造〔市蔵〕先生、伊東乾谷先生。どうも變つた學校で、創設のことでありましたから、いろ〳〵奉職して居つた先生も皆變つて居り、生徒も變つて居りました。私共入つた時は學校がどんなことをする學校か知らなかつた。鑄物をすると云ふと、九段の遊就館にある象篏（ママ）のある大砲、鐵砲、あゝ云ふのを造るのだろうから自分等も一つ立派なものを造つて見たいと思つて入つたと云ふ人もあつた位で、話して見ると隨分滑稽な望で入つて來た者も居た。

岡倉先生は例の變つた性癖の持主で有りました。海豹の天平靴を穿きまして、馬は日本種の馬でなくてはいかぬと云ふので南部から日本種の馬を取寄せて、令弟さんが朝鮮に參つて居られましたのであちらから取寄せた朝鮮の鐙を附けて、紫の房を附けた黒塗の鞍で馬に乘つて、笠は丁度東坡や杜子美の繪にある様なのでありましたから、或人が馬上の鍾馗だと云ふやうなことを批評した人がありましたが、さう云ふ風で、私共或時に向島の櫻を見やうと云ふので鐘ケ淵の方から櫻を見ながら歸つて來ますと、異様な風俗で馬に乘つ

て來る人がある。どうも妙な風俗だと思つて傍へ來ると岡倉先生であつた。先生の別當に馬口を取らせまして、先生が半弓を持つて居る。御辭儀をして御早うございます、どちらへと申すと、一寸鳥を射やうと思つて……。今時分弓で射られる鳥も居るもんですかと言つたら、あはゝと笑つていらつしやいましたが、先生も變つてをり、從つて外の先生も變つてゐた。

今泉先生等は講義をする時にたんかを切つて江戸ッ子辯で、御前知るめいが……と云ふ調子で講義して居る。先生を雲龍先生と稱した。それは何をする時に斯うやる。其恰好が山樂筆の龍が雲に昇つて行く圖に丁度似て居るので雲龍先生と渾名を附けた。非常に面白い。話をすると長くて話が中々盡きない。先刻も話がありました或生徒が今泉先生に何か異見をされたことがある。何某が先生から異見をされて居る、聞きに行かうと云ふので其室の窓の所に立つて聞いて居ると面白いです。異見か何か分らぬ。遊ぶことも酒を飲むことも若い時分には盛んにやるが宜い。何だか異見をして居るやうでない。奬勵して居るではないかと、一同啞然としました。餘程變つて居りました。

黒川先生も又面白かつた。先生は國語と歴史の擔任でありましたが、國語の時間でも知らず〳〵二時間續きで講義をするが、寄席へ行つたやうな氣持で飽きない。飽きないやうに面白くやるもんですから、丁度落語を聞くやうな心算で聞いて居る。それで蠟の中へ砂糖水を入れて時々氣付と云つては飲み〳〵始終講義をして居る。さうして生徒が飽きて來ますと、洒落を入れて、「足曳の山鳥」の此足曳は、びつこを引いて、僕も足びきだが、僕の足びきでないと云ふことを言つて洒落を入れた。「いと憎し」と云ふ身振りをしまして、君等は知つて居るかどうか知らぬけれども、花魁が或男を憎らしいと云つてつねる、其憎らしいだ、(笑聲)實に旨いです。表情等が……。皆講義中に手を敲いて喝采するやうなことが有つた。試驗の問題等も生徒が惡戯に先生斯んな問題を出すだらうと先に行つて黒板に試驗の問題を書いて居ると、そこへ先生がやつて來て、是は宜い問題だ、此問題を試驗に出さう。試驗の時に教室で乾南陽がノートを出して先生此所でせう、と聽くと、それ〳〵と云ふ仕末で、試驗の答案は綺麗に書いて早く持つて行くと百點、九十七點、八十七點、七十七點、六十七點。此五つしかなかつた。綺麗に書いてあると滿悦で、俺は決して落第は出さぬから、平常勉強しろ。落第はさせぬ、と始めから言つて居るのでありました。先生に面白い話がある。先生の終生の傑作だらうと思ふのですが、先生が大化の制度の話をした時である。衣冠制等の話をした時に、比較の意味で當時の服裝のことをいろ〳〵話して、今でも勅任官の服は斯う云ふ金モールがある、判任官はどうと、其制度の話をした。平常こんな風に親しく友達見たいにおどけ話をして居たもんですから、先生は奏任官の金モールの服を持つて居りますかと云ふと、うん持つて居る。今度見せてやろう。何かの折に金モールの服で宮中へ參内した後に來て講義した。所が先生教壇に立つて、當時繪の教室、斯う段々になつた教室にテーブルを置いて一段高くしてある假の教室なもんだから、テーブルの下から見える、椅子に腰掛けて居る前のズボンのボタンを嵌めずにしやがんだもんです。褌がズボンの中からはみ出した。白濱が一番前に居つて見たが言ふことが出來ぬ。先生、と指差して、そこが〳〵とやつて居ります。皆くす〳〵笑ひ出す。秘書の

やうに附いて居る加藤某、加藤千蔭翁の孫の人ですが、先生の傍の階段に始終附いて居る人が狼狽てゝ行つてボタンを嵌めた。先生平然、これが本当の金洩るだ。（笑聲）

上原先生は物理と化學の擔任で、其自慢の話、日本で西南戰争の時に風船〔軽気球〕を造つたのが俺で、風船の元祖は俺だと何時も得意に話された。先生は尺八の名人で、東京で荒木古童が一番、其次は先生との評判でした。合せ物は殊に名手だと云はれました。夫で物理の時に尺八を持つて來たので、皆が一曲願ひますと、やらうかなと云つて、教壇の上へすわつて鶴の巣籠りと末の契を二曲奏せられた。其咳拂が山羊に似てゐるので山羊と渾名した。教へて居る本が振つて居る。洋行の時〔上原に洋行歴は無い。〕明治四年に買つたロスコーの化學の原書であつた様で、眞黑な表紙の小さな本で、それを參考に化學を教へと居つた。斯んなことは御前等はやらぬでも宜い、好加減と所だけで必要のないものは宜いと云つてやらなかつた。

彫刻の方の高村先生も若かつたもんですから勤勉家で、先生の實話としては猫の足の話、先生の若い時、師匠の家で内密で御馳走を食べて、唯では面白くないと、大根で猫の足型を彫り、流しへ附けて置いたら、夫で猫が食べたことになつて遂々分らなかつた、と彫刻隱藝の話を教場でしまして、親子の様に親しく致しました。

夫から竹内先生。渾名が鼠。身體が小さくて非常にちよこ〳〵敏捷で鼠のやうでした。此人は非常に洒落の名人で、教室で調子に乗りながら何かと洒落が出る。時々變な俳句をやりましたり、狂歌をやつたり、雜學者と云ふ風な人でありました。醉拂ふと玉乘りの眞似をする。唯足で斯う玉に乘つて居る恰好をして、仕舞に躓いて轉ぶ恰好が實に旨い。

それから石川先生は象牙彫の先生でありましたが、非常に薄肉の彫刻が旨い先生でありました。有名な傑作が英國に出しました鹿を彫つた大きな扉で、其彫つた物を見せて戴きました。

後藤貞行と云ふ先生は馬彫りの名人で、楠公銅像製作の時は美術學校に雇はれて來て、寫眞を撮られる時、強藥が爆發して片眼潰れました。此人は馬上で手槍を使ふことの名人で、何時でしたか校内で岡倉さんの馬に乘つて手槍を使て見せられたことがありました。

それから大島先生は蠟型の非常な名人で、是は間違ひかも知れませぬが、十四位の時分に三人手間を取つたと云ふ話を聞きました。蠟型が上手で、話をしながら手で斯んな風にしながらきつきつとやると、獅子の首の所の毛の流れて居るのがひよつと出來て仕舞ふ。實に蠟型がよく出來た。

次は繪の方で、橋本先生も非常に勤直な先生だが、時々面白いことがあつた。或時先生が教へに來て下さるのが遲いので皆が寢て騒いで居つた。其處へ先生が這入つて來て、誰でしたか生徒の名は忘れましたが、突然起きながら、果報（雅邦）は寢て待て。先生は、面白い、それでは斯うしませうと云ふので、出勤簿に認めを横に押した。認めを横に押して大笑ひしたことがあります。生徒の方も旨いが、先生も横に押した所が旨いと思つた。（笑聲）そんなこともありました。それから橋本先生はうん〳〵うなつて畫いて居られたので、此組の教室はうん〳〵と云ふ聲を出しながら汗水流して繪を畫いて居つた。中に禪學に余程凝つた生徒が居つて、谷中の墓地に行

つて裸で寢て居つた所が烏が突付いたと云つて、喜んで歸つて來て、死人の如くに見られたから私は悟を開きました、と云つたら、烏に死人と思はれてつつかれたが夫が痛くて起きて仕舞ふやうでは駄目でないか、と丸で禪坊主の禪問答のやうな形で、橋本先生の組にはさう云ふ騒ぎをして居りました。

それから、川端先生はあばたがあつたのでがんもどきの渾名で、丸々太つて馬鈴薯見たいな恰好をした手で美しい繪を描かれた。顔に大きな黒子があつたのでポイントとも云つた。先生の繪の教へ方も能く考へると面白い。生徒が下繪を持つて行きますと、墨汁を附けた筆を紙の上で敲いて點々をつけ、墨のとんだ色々の形に依つて岩になつたり、鳥になつたり、突嗟にやつて畫いたことがある。それからコロンブス博覽會に出しました壁畫の柳の繪を畫きました時に、柳が何本か立つて居る、其の柳をどう云ふ風にして畫くか、畫く時を見たいなと申すと、見せて呉れましたが、墨を筆に附けまして一間ばかり飛びながら線を引いて何かぽん〳〵附けると青柳が出來た。此曲藝見たいなことに驚いたことがあります。

それから、海野先生と云ふ方は岸澤の太夫で三味線の名人でありましたが、何時迄斯んなことをして居てはいかぬと云ふので奮發して彫金を勉強された方でありますが、校内の展覽會の時に、或人が尺八を吹いて居りましたら、先生浮かれ出して小さな聲で尺八に合して唄ひ出した。學校でそんなことがありました。

小川松民先生は私共等生徒の時分にはとのこで線等を引くことを教へましたが、本當か嘘か知りませぬがこの先生の美談として、學校の先生になつてからも位牌の字を書いて昔の貧苦を忘れぬやうに致したと云ふ話があります。

それから、伊東乾谷先生、是は大變なんです。是は變り塗の先生で、話を始めたら中々盡きない。外でも何でも相手構はずやるから、放課後の四時頃には先生の傍へ行かない。捕つたら話が永くつて切れないで、五時位迄聞いて居らなければならぬ。學校で先生に捕つて仕舞ふと大變だから行くな〳〵と云つて誰も寄らない。學校のお仕舞ひに途中で會ふと三十分位捕つて話が後から〳〵と出るので逃げることが出來ないで聞いて居らなければならぬ。生徒が始終言つて居つた。伊東先生と今泉先生と話をさしたら定めし面白いだらう。所が日光へ修學旅行した時に、昔の舊式の汽車で横から這入て向き合ひになる汽車だつたのですが、今泉先生と伊東先生とが向き合はれた。汽車が出ると話をずつと續けて、一寸十分程切れると又繼足して改めて扨と云ふことで話が出て、それがずつと日光迄話して云つて、日光の停車場を下りて街をずつと中禪寺の山の上迄二人の話が切れない。大變な時間でせう。(笑聲)喫驚して仕舞つた。

それから、彫刻科の生徒の方では大村西崖氏が一番古い人で、同氏は非常な堅藏で、卒業製作に聖德太子の御尊像を彫刻いたしました。學生時代には苦學して居つたが、百圓出して一切經を買ふと云ふ程で、非常な勉強家でありまして、あゝ云ふ風な人になりました。

白井君も有名な人で、學生中下宿屋に四斗樽を置いたと云ふ風で、非常に酒が好きであつた。酒は揉めると味が旨いと云ふので德利に紐を附けて其紐を引つ張りながら勉強した。

新納君は學校時代には非常な勉強家で、親切で、殊に私よりは年

上なので兄の様にして交際して居りましたのです。珍しく眞面目なので、洒落が分らなくて困つた笑話などもあります。

其他生徒にも澤山面白い話がある。それから其頃變つた姿をするのが行はれて、色々異様の出で立で澄して大道を濶歩し登校致しました。小生も、卒業製作に元祿美人を作りましたが、それが爲に元祿若衆の姿がして見たくなつて、とふ〳〵丸袖の衣裳羽織を着て元祿の編笠を被り、華かな五本骨の扇を翳し、蒔繪の印籠と染革の燧袋を腰に下げ、古代紫の革足袋に雪駄を穿いて人目を引いたやうなこともありました。香取君等もいろ〳〵古い風俗と云ふので、紫の糸か何んかで髪を切り下げて結んだ。(笑聲)是で居て香取君は磯節を擴めた元祖です。十七、八の時に先輩に連れて行かれて或所に於きまして君も何かやれ〳〵と言はれた。そして其時分には磯節なんか流行つて居なかつたので、何の氣なしに磯節をやると、藝者が是は上手だ、隅つこへ置けない、もう一つもう一つと歌はして、遂に手を附けて磯節をものにして仕舞つたと云ふ話があります。

それから、其時分滑稽であつたのは、寒天が彫刻の教室に澤山あつて、それを羊羹にして食べて仕舞ふ。學課時間が十一時から十二時迄あつた。其前に、朝行つて寒天を木彫の膠を溶かす鍋で溶かして、引出を開けて其中に流込み、砂糖を入れて、それから學課の方へ出て行く。歸つて来ると程良く固まつて居る。それを切つてお茶を入れて食べる。或時、日曜に學校へ出て校友會への出品を製作しながら羊羹を作つた時、丁度そこへ高村光太郎君が遊びに來た。十二、三の坊ちやんです。光ちやんが來たから御馳走しやうと寒天の羊羹を出した。家へ歸つてから學校へ行つて寒天を饗ばれたと言つたので、翌日先生から小伜が御馳走との御挨拶で、遂々寒天が無くなる理由が分つて仕舞ひまして、全く大笑ひのことがありました。

それから、其時分に濃尾の地方に大きな地震がありました。學校が舊博物館の所でしたが、あんな大きな建物であるにかゝはらず、窓へつかまつてゆすると大地震の様にみし〳〵動く。濃尾の地震の大慘害後で、東京でも大分怯えて居つた爲めに、ぐら〳〵やると竹内先生は驚いて飛出した。其時彫刻で使つて居つた大工が二階から飛下りたので腰を抜かして仕舞つた。大工と云ふ名前で、彫刻の道具を磨がして重寶して居つたのが來なくなると非常に不自由して、仕方なくいやながらも彫刻の道具を自分で磨がなければならぬ。是は困つたことだなと皆でこぼしたことがありますが、さう云ふ惡戯をやつたことがありました。

それから、珍らしい屁合戰と云ふ巻物があつて、傳に鳥羽僧正が畫いたと言つて居ります。それが、學校の圖書室に模本であると云ふので、それを借りて來て、此繪巻を見て屁のひりつこをやらう、是は面白い、と云ふ譯で下宿屋の二階に巻物を擴げて、燒薯を大笊で以て一抱え買つた。皆でそれを食べまして屁合戰をやり出した處が、或一人が實彈を射擊し混亂を極め、屁合戰がおぢやんになつて仕舞つたことがある。(笑聲)

夏は素裸で棒押、枕引、相撲、さう云ふことばかりやつて暴れたが、一方美術家と云ふものは優美な所がなければならぬ、一つ歌を稽古しやうじやないかと、加藤某と云ふ人を招き、いろ〳〵歌の話を聽き、それから黑川先生にも教へて戴き、始めは眞面目にやつたが、仕舞ひには飽きて、何か變つたことをやらう。今度は學校の先

生を題にしてやらうではないか。やつた所が振つて居る。岡倉校長のが、校長を御神樂（岡倉）舞ふて祭り上げ……後は忘れましたが、高村先生のは、

佛師より高等官となりにけり
げに幸運（光雲）の人にもあるかな

安井匡〔一匡〕と云ふ人が背が高い、六尺豐かな人で、それが會計の係長でした。

學校で第一番に高い人を
などて安いと人の言ふらん

體操の先生が劍持と云ふ豫備の軍人か何んかでありました。此人のは

兵隊に行くしかおのが苗字をば
劍持さんと言ふぞおかしき

遂々歌も止めになつて仕舞つてそれきりになつたことがありました。

それから、其時分學校で優美なことをしなくちやならぬと云ふので、志野流の香をやつたり、お茶をやりました。お茶は今泉先生が師匠になつて、始め羊羹を食べて喜んでやつた。羊羹ばかり食べて直ちに居なくなつて仕舞ふので、今度は煎餅、それも食べて仕舞ふので、今度は燐寸の棒を入れて、（笑聲）是が御菓子です。遂に燐寸になつて仕舞つたから誰も行く人がなくなつて、是もおじやんになつた。志野流の香には細谷と云ふ人が銀座から來て呉れまして、香をやりますと午後一時から七時頃迄やつたので、仕舞ひに我慢が出來なく苦しくて堪らず、遂々一遍で參つて仕舞つて、次の時には生徒が來ないもんですから、氣の毒ながら香もおじやんになつた。

其頃學校で擊劍があつて、それは面白かつた。面や胴をしないでなぐる。心の擊劍だと云ふのでなぐつて來ると、先生竹刀をひよいと出すと眼がくらつとして止る。強く打つ程、後ろへ倒れたりする。其中に岡倉先生も大分會得して自信があつた。劍持先生に打をやらせた。劍持先生がひよいと一つやつたら頭を丁と打たれてしまつて、大喝采の事があつた。それから其時に面白かつたのは、誰でございましたか、名は忘れましたが、袂に豆を入れ、擊劍をやつて居ると豆がばら〳〵こぼれるもんですから、先生も吹出して擊劍も止めになつて、大笑ひに終つて仕舞つたことがありました。

それから、モデルで面白い話がありました。今のやうにモデルを使ふことを知らないもんですから、何十分でも立つた切り居るので、皆參つて仕舞ふ、それに若い生徒が周圍から惡評するので驚いて長く續かぬ。お婆さんで珍しく長く續いたのがあつた。目尻が下つて居るとか鼻曲りだとか云ふので大概のモデル女は參つて仕舞ふのですが、そのお婆さんだけは毎日缺かさず來て隨分惡口を言はれるのに平氣で濟して居る、聞て見たら吉原の花魁であつた。昔素見で鍛へた爲めに平氣なので、それには負けた。其次に相撲で朝日洋と云ふ三段目を使つた。立派な體を描くと云ふので、それには形だけを寫すのは面白くないから腕とか胴にどうしても力を入れなければいかぬと云ふ譯で、鐵の棒の長さ三尺あるのを捧げさせて何時間もやらして居るもんだから、流石の三段目の力士も一日で降參してその翌日から來なくなつて仕舞つた。

それから私の組の何某と云ふのが、聲色の非常に旨いのがあつ

た。歌舞伎新報を懐中に入れて居て、時々教室で芝居の眞似をやる。巧妙で丸で歌舞伎を見て居る様でした。滑稽極つた男でありまして、一寸先生に質問するのに其先生の聲色を使つて質問する。黒川先生に質問する時には黒川先生の聲色、長尾先生の時には長尾先生のでやる。普通科の者が本科に分れる時に送別の會があつた時分に、先生が生徒を諭す言葉を諸先生の聲色を纏めて一つの文案を作り、また生徒のいろいろの癖を取つて答辭を述べるのです。丁度大橋君等は槍玉に擧げられたもので、岡山縣ですから「歸へる」と云ふものを「けえる」と云ふものですから「是より開會（けい〳〵）致します」と云ふ様な調子でお國訛りの面白い演説をやつたり、面白い文章を作つて笑はしたりする事が實に旨かつた。此人は晩年圖畫教育家になりまして、滑稽過ぎる程の人でありましたが、眞面目な師範學校の先生になりました。小使等にも變り者が澤山居りまして、其中に大神樂をやるのが居りました。生徒がやれ〳〵と云ふと、ストーブに焚く木を鼻の上に積んで色々と大神樂の曲藝等をしましたが、非常に巧でやんやの喝采でした。一人の小使は旗本の殿様で、夫が小使長で頑張つた非常な頑固な小父さんでありました。其他にも二、三人居りましたが、皆妙な男ばかりで非常に變つて居りました。經師屋の銀さん等も變つて居る人で、岡倉先生のお伴をして京都に行つて御湯へ這入つた。熱いもんだからはめを蔽いた所が三助が怒つて何とかどなつてやつて來ましたから、それを見て風呂の蓋をこん畜生と振上げた所に岡倉先生が入つて來たので、先生を振向て（身振りを示す）先生此勢ひはどうです。後で又それを振上げると先生がこつちを振向いたので、先生どうです、どうです。さう云ふ風な面白い男でした。遂々仕舞ひには有名な經師屋の親方になつて、橋本先生の恩に酬ゐる爲めに木像を作つた。芳崖先生のお寺にも寄贈したり大變に両先生に盡して居りました。未だいろ〳〵面白い話が澤山ありますけれども、大變長くなりましたから、此邊で御免を蒙ります。（拍手）〔以上、段落、句読点は編者による。〕

（「本校創立当時回顧座談会」『東京美術学校校友会月報』第三十巻第一号。昭和六年四月）

② 帝国博物館設置

明治二十二年五月十六日、宮内省図書寮に附属していた博物館は廃止され、新たに帝国博物館（東京。同二十三年開館）、帝国京都博物館（同三十年開館）、帝国奈良博物館（同二十八年開館）が設置され、総長（三館を統率）に特命全権公使兼宮中顧問官九鬼隆一が就任した。帝国博物館（東京）の館長は九鬼が兼任し、理事には宮内省諸陵頭川田剛（歴史部長）、岡倉覚三（美術部長）、前博物館長山高信離（美術工芸部長）が任命され、同年七月に天産部が追加されてから理事が一人増え、高等師範学校長高嶺秀夫（天産部長）がこれに任命された。同年十一月に至り文部属久保田鼎が主事を命ぜられた。美術部は岡倉のほかに川崎千虎（書記）、山県篤蔵（学芸委員）、福地復一（傭）、松尾四郎（同）らの職員がいた。

以後、本校は帝国博物館と敷地を相接し、事業上あるいは人的交流の面で密接に提携してゆくことになった。双方ともに岡倉、九鬼らの美術局設立構想、即ち日本美術復興のため総合的、統一的に美術行政制度を確立しようという構想を母体として生まれたもので、

言わば姉妹の関係にあり、その構想が生き続けていた間、具体的に言えば岡倉が官界を追われるまでの間は特に密接な関係が保たれた。

③ 『国華』創刊

明治二十二年十月、岡倉覚三は内閣官報局長高橋健三（号自恃居士、安政五年～明治三十一年）とともに『国華』を創刊した。木版多色刷の図版を入れた豪華版の月刊美術雑誌で、それまでの美術雑誌『大日本美術新報』、『東洋絵画叢誌』、『美術園』等とは一線を画する高踏的性格を持っていた。刊行は現在も続いており、その歴史はフランスのガゼット・デ・ボザール（一八五九年九月刊）に次いで世界第二位と古く、内容も世界的に高く評価されている。

岡倉と高橋は明治十七、八年、ともに文部省御用掛だったころから親交があり、ナショナリズムの信条と日本美術復興の理想という点で共通するところがあった。高橋は明治二十一年に本校商議委員となって岡倉の学校運営を助けることになったが、翌二十二年には陸羯南らとともにナショナリズムの拠点とも言うべき『日本』新聞を創刊している。同紙は創刊と同時に「日本歴史上人物の絵画若くは彫刻懸賞募集」を行い、その結果、竹内久一の「神武天皇像」（本学蔵）や山田鬼斎の「護良親王乗馬像」（鎌倉宮蔵）の木彫二大作が生まれるのであるが、これは同紙の主宰者が岡倉の美術運動および本校運営を支援していたことの証明である。

竹内久一作　神武天皇（本学蔵）
総高 297.2cm

かくて、岡倉と高橋は九鬼隆一、浜尾新、河瀬秀治、黒川真頼、岡部長職らの賛成を得、印刷関係のことは小川一真（アメリカで写真術と印刷術を学び、九鬼・岡倉らの古美術調査で活躍。美術写真撮影とコロタイプ印刷の発達に貢献。）と川田徳二郎（高橋健三の部下）の協力を得て『国華』を創刊した。初めの頃は本校関係者が多く執筆しており、内容は古美術研究に限らず、当代美術（国風）に関するものも多く含んでいた。本校関係者の執筆例は左の如くである（数字は号数を示す）。

フェノロサ「美術哲学概論」③「美術ニ非サルモノ」⑤
岡倉覚三「円山応挙」①「狩野芳崖」②「支那南北の区別」㊹
橋本雅邦「木挽町画所」③
川端玉章「円山派」④
巨勢小石「巨勢派」⑥
高村光雲「奈良の彫刻物を見て」②「仏師木寄法」上・下⑥⑦
加納夏雄「金属彫刻（金工）に就て」一、二⑩⑪
小川松民「蒔絵に就いて」⑨「蝶の手箱」⑩
今泉雄作「茶室考」一～三①②③「本邦陶説」一～十一④⑤⑨⑩

⑫⑬⑯～⑲「橋本雅邦」⑦「図按法」一～三㊼㊾㊶、その他

黒川真頼「東大寺正倉院の話」①「法隆寺建築説」一～三⑨～⑪「蒔絵説」⑦「織物説」⑬、その他多数

川崎千虎「本邦武装沿革考」一～七二①～⑬断続的に寄稿、「絵所預家」⑦「絵合考」㉓「金工横谷氏」㊲「是真」㊼、その他

福地復一「法隆寺伽藍縁起流記資財帳」㉕「伎楽面」㉛「能面の説」㉘㉙「模様考」一、二㊼㊽「印度古代の美術」一～四㊶～㊹、その他

小杉榲邨「上古中古に渉る美術物品の支那及び朝鮮に関係ある略説」一～三㊿㊸㊹、その他多数

第二節　明治二十三年

東京美術學校第二年報　明治廿三年分

學　規

本年三月十九日本校規則中學科課程第三條普通科第一年第二年和漢文ノ後ヘ體操同三時ノ五字ヲ追加シ又學年學期及休業規程ヲ學年及休業規程ト改メ其第一條第二條並ニ試業及證書規程ノ條ヲ左ノ如ク改正ス

學年及休業規程

第一條　學年ハ九月十一日ニ始マリ七月十日ニ終ル

第二條　休業ハ十二月二十五日ヨリ一月七日ニ至ル二週間七月十一日ヨリ九月十日ニ至ル二箇月トシ日曜日及左ノ祭日祝日ハ休業ス（但祭祝日ハ従前ノ通）

試業及證書規程

第一條　學年試業ハ毎學年ノ終ニ於テ之ヲ行ヒ其成績ト平常課業ノ成績ヲ二倍シタルモノトヲ比照シテ合格ノ者ハ進級セシム

平常課業ノ成績ハ一學年間課業ノ成績ニ由リ受持教員ノ見込ヲ以テ之ヲ定メ又臨時試業ヲ行ヒ之ヲ定ム

第二條　學年試業ニ缺席ノ者ハ進級ノ格ヲ失フモノトス